「永瀬清子の里」地図

作品の引用にあたっては、発表当時の社会的状況・時代背景・文学的価値などを考慮し、そのまま引用しています。

母の家の東側、私の家のはすむかいに苔むした古い塚があり、それは和気の清麻呂の墓と云い伝えている。

清麻呂の館は松木部落を負うた山の斜面にあつたのだと云い、よく横穴や勾玉なども掘りだされる。こゝは古い山陽道の馬つぎ場所で「まつき」と云う名もそれを示している。

私の名前はその「清まろさま」に因んで「清」と名づけられた。

（「思い出す日々（一）梅咲く頃に生れて」『女の新聞』六八号 一九六四年二月より）

その家を私は好きだった
まわりの見も知らなかった共同体が
私と子供たちをかばってくれた
汗はそれだけの甲斐があり
畑に蒔いたたしゃも瓜もみんなの
身になった
畦には豆もみのった

（「その家を好きだった」『あけがたにくる人よ』より）

①永瀬清子展示室

赤磐市くまやまふれあいセンター 2階
〒709-0705 岡山県赤磐市松木621-1
（赤磐市立熊山公民館北隣）
TEL(086)995-1360

開室時間 午前9時～午後5時
休館日 毎週月曜日・12月28日～1月4日
入館料 無料

子どもらよ
のびゆく木の芽そのまゝの
かゝやくおまえのほゝえみが
母等の日日のこよなきねがい
碧なす 旭川さながらの
きよい旭川さながらの
ゆたかなおまえのゆくすえが
母等の日日のつきせぬいのり

（熊山公民館前 永瀬清子詩碑「いのり」碑文全文）

あたらしい熊山橋は
茫と白く宙にうかんでゐる
空は星にあふれてゐるが
西の天末にはまだ猫眼石いろの光が
フットライトのやうに
かなたの半球のあかるみを投げあげてゐる

（「熊山橋を渡る」一九四八年一月十四日 昭森社版『永瀬清子詩集』より）

①永瀬清子展示室

【詩碑】
②詩碑「いのり」（赤磐市立熊山公民館前）
③詩碑「熊山橋を渡る」（制作 白石齊 書 額田桂崖）
④石のモニュメント（制作 白石齊 書 額田桂崖）

【ゆかりの場所】
⑤永瀬清子生家「清子の家」（国登録文化財）
⑥伝和気清麻呂公墓所（市指定文化財）
⑦松木公会堂（＝現 松木公民館）

【作品に登場する山】
⑧新田山（しんでんやま）
⑨大盛山（おおもりあげ）
⑩熊山

【校歌を作詞した熊山地域の学校】
⑪小野田小学校
（＝廃校・現 熊山英国庭園 ※校歌碑あり）

⑫赤磐市立豊田小学校
⑬赤磐市立磐梨小学校
⑭赤磐市立磐梨中学校
} 見学はできません

【その他】
⑮詩の看板（JR熊山駅前ロータリー）
⑯「永瀬清子の里」案内板（熊山工業団地入口）
⑰詩の庭
（清子の作品に登場する植物を植えています）

公会堂が出来たら
よい事を話しあはう。
よい事を考えあはう。
羊歯や笹やつゝじの枝を折りしだいて
山から伐り出されてくる松の木。
いたましい戦争のためではなくて
美しい国を創くるために
曳きだされてくる松の木。
あたらしいいい匂ひのする松の木。

（「松」『美しい国』より）

当時の松木公会堂は、建て替えられ、名前も松木公民館に変わっています。ただし、清子が詩に書いた頃と同じ場所にあります。

はなれの窓からは
水田をへだてて
新田山が おだやかに横たわっていた
その上にすれすれに
ぴったり さそり座のアンターレス
まるで巨きな束ね熨斗のようだった
或いは横Sの字にもみえ、かがやいていた
その星座が その窓から母の部屋をいつも
見守っていたのだ

（「アンターレス－さそり座への願い」『春になればうぐいすと同じに』より）

吉井川
古くてあたらしい女
その奔さもその沈黙も
私自身のつめたい内臓
私の奥にお前があらはれ
お前の中に私はとける

（「吉井川によせて」『春になればうぐいすと同じに』より）

すっかり仕事がすむ頃、空には星が出はじめ、私は闇の中に一人たたずんだ。

水の音がまだ聞こえるかどうか私はじっと耳を澄ませていた。

すると私の向いあっている東の熊山の頂上に、誰かが炬火を振っている。星にしてはあまりに大きな光。それにぽっと月の出のようにまわりが赤らんでみえる。そして何かの合図のように大きくゆれている。でも誰が何のために今頃炬火を振るのだろうか。

あやしみながら私は見ている。

ゆれている炬火は次第におさまった。すこしずつ山をはなれ、それは空中にのぼりだした。

それはやっぱり星だったのだ。

（「揺れさだまる里」『流れる髪 短章集2』より）

【凡例】
Ω …記念碑
Y …消防署
X …駐在所
〒 …郵便局
文 …小中学校
■ …建物
▲ …山
● …ゆかりの場所等